

---

# 光の聖女と夜天の剣

HAL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光の聖女と夜天の剣

### 【Nコード】

N0245BA

### 【作者名】

HAL

### 【あらすじ】

辺境の村に住む少年は退屈な毎日どこか不満を感じていながら、ただ繰り返し返される平穩の中に身を置いていた。しかし、それは突然にあっさりと崩れ去り、運命が動き始める。始まりは、とある少女との出会いだった。

かつて神が創りし世界で、少年少女が織り成す王道ファンタジー。

## プロローグ

悪い夢を見ているかのようだ。見上げた空は暗く、青空を隠す爆煙が立ち込めている。村のあちこちから火が燃え上がり、既に建物は全壊。ただ紅蓮の炎だけが存在し俺の周囲を囲んでいた。

どうしてこんなことに。

いつも通りの朝を迎え、普段と何ら変わらぬ日常が幕あけた日、だがそれは一瞬にして崩れ去った。

俺の暮らす村、アルカイト村は国境沿いにある小さな村だ。何の変哲もない、特筆すべき点もない村。何も変わらぬ日常がただ過ぎ行く、そんな村であったが、俺は嫌いではなかった。決して不満がないわけではなかったが、それでも俺はアルカイト村で暮らすことを嫌だと思ったことはない。漠然と、このまま大人になって死んでゆく運命に疑問を感じていながら、俺の胸にあったある種の危機感はいずれ忘れ去るものだと思っていた。

だがしかし、平穩の終わりは唐突に、俺の知らぬ所で始まっているのだ。

最初の変化は誰かがあげた悲鳴だった。小さな村なので、その悲鳴は村中に響いて、次の瞬間には村人全員がハッキリと認識したと思う。空に浮かぶ人外の存在を。

腕と翼が一体化した、俺よりも二周りは大きい体を持つ翼竜が俺たちを見下していた。翼が打つ風の音だけで縮み上がって動けなくなりそうな恐怖を感じたことは覚えている。だがそこから先はよく覚えていない。翼竜の一番近くにいた人が八つ裂きにされ、村は恐

怖のどん底に落ち混乱を極めた。我先にと逃げ惑う人たちは翼竜の放った火炎の息吹に焼かれ次々に死んでいき、村は静かになった。

そして今、俺の目の前に翼竜が羽ばたいている。ぎらつく紅い眼、血にまみれた牙と爪がつい先日まで俺と笑いあっていた人のものだと思つと余計に恐怖がわいてきた。

どうして俺が最後の一人になったのか、その理由はわからない。たぶん運が良かったのだろう、絶望に捕らわれ動けずにいた俺は結果的に最後まで生きている。そう、きつと生き残っているのは俺だけだ。悲鳴は絶え、村の入り口は激しく燃えている。何となくわかつてしまったのだ、みんな殺されてしまったのだと。

だけど、俺の心は妙に落ち着いていた。体中の血を失い、思考が麻痺してきたのだろうか。待ち受ける死に対しての恐怖は当然ある。しかし、その確定してしまった未来を覆せないと知ったとき思った、これが死ぬことなのかと。例え生き延びたとしても、村を失い、あらゆる人間関係すらも断たれた俺に生きていく術などないのだからそれでもいいかと思えた。

翼竜がとうとう俺を殺すと決めたらしい。大きな口を開き丸呑みにせんと迫ってくるのを呆然と見ていた。ただ、最後に思ったのは、もう少し生きたかったなと。ホンの少しだけ願って目を閉じた。

そして、その願いは叶った。

いつまでも来ない衝撃を疑問に思い、目を開くと飛び込んできた光景に俺は言葉を失った。

目の前にあつたのは翼竜の顎ではなかった。一人の女性が俺の目の前に立っていた。

金色の長い髪が背中を覆い、まるで自ら発光しているかのように輝いている。やわらかい、暖かな光がこの地獄のような場所に差し込んでいると感じた。その淡い金色をみたととき体中の痛みが消えたように俺の心は安らぎ、かろうじて保っていた意識を俺は手放した。そのとき、俺はそんな場合ではないというのに、その光をただ綺麗だなと思った。

---

暖かい光の中で俺はまどろんでいた。とても心地よい優しい光の中で、いつまでも醒めぬ夢の中にいるような感覚。だが、この世に永遠なんてあるはずも無く、俺は目を覚ました。

「うーん……。ここは一体……？」

周囲を見渡せば、ここはもはや黒こげて原型がわからなくなった

屋内だとわかる。その壁を背に俺は寝かされていた。一体何故？

そこまで考えて、記憶が一気に押し寄せてきた。そうだ、最後俺を助けてくれたのは一体誰なんだろう。ともかく状況を確認すべく立ち上がった俺は妙な違和感を感じた。

怪我が治っている？

騒ぎの中で負った怪我全てが傷跡一つ残さずに完治しているので、まさか本当に夢だったのではと一瞬考えもしたが、周囲の様子からそれは在りえないことだとわかっていた。そんな馬鹿なことを考えてしまった俺の耳に床の軋む音が届き、俺はその音源を見やった。

そこにいたのは、間違いなく俺を地獄と絶望から救い上げた人物だった。

歩くたびに揺れる長い金色の髪はとても美しく輝き、こちらを見据える蒼の色彩を宿す瞳はまるで至高の宝石のようだ。身に纏う純白の服には蒼のラインがあしらわれていて、なにやら神秘的な服装だ。そして、惜しげもなく晒された腕や脚は驚くほど白く澄んでいる。

その、美しすぎる姿に俺は数瞬、あるいは数秒絶句してしまい、なんとか意識を戻したときには彼女は俺の眼前にまで迫っていた。

「目が覚めた？どこかまだ怪我しているところは？」

紡がれた言葉を理解することは出来たのだが、余りにも現実とかけ離れた容姿の美少女に問われ、俺は恥ずかしながら言いよどんでしまう。

「え、いや、あの……。だ、大丈夫です」

情けない話だが、俺は女の子というものにほとんど耐性がない。失礼ながら、村の同年代の女の子達は幼少の頃から一緒に飛んだり跳ねたりして遊んでいたので、女の子と認識したことはなかった。だから、目の前に居るこの可憐な少女に対して、多少ドギマギしてしまうのは致し方ないのだと自分に言い訳していた。

「あ、頬にまだ切り傷があるわ」

「え……」

だから、そう言って手を近づけてくる彼女に反応できず。しかし俺は彼女が起こした現象を見て呆気にとられた。見たままの光景を言葉にするなら、彼女の指先が淡く輝き、その光に触れた傷が癒えたのだ。

「い、今のは……？」

驚きに言葉を取られ目を見開いた俺に、彼女は僅かに首を傾げ、すぐに納得したような表情になった。

「ああ、魔法をみるのは初めて？」

「ま、まほ……？」

「魔法、よ。でも取り敢えず、その説明はあとでいいかな？」

初めて聞く言葉に興味を示した俺だが、確かに今重要なのはそんなことではない。彼女の意図するところも同じだろう。だから俺はまず簡潔に名乗ることにした。

「俺はレナス。レナス・アークスだ。レナスでいいよ。君は？」

「アイリよ。アイリ・セルナート。私もアイリでいいわ」

アイリ、アイリ・セルナート。それが俺の命の恩人の名前。胸の内、心に刻み付けるように反芻して、改めてアイリと向き合う。

「ありがとう、アイリ。君のおかげで助かったよ」

心から感謝の気持ちを言葉に込めてそう伝えた。命の恩人である彼女に対する恩はそれだけで返せるものではないが、まずはそう言っ  
て頭を下げた。

だが、顔を上げて様子を伺えば、アイリはその整った美顔を僅かに歪ませ、申し訳なさげな表情を浮かべている。

「ごめんなさい。私には君にそんな風にお礼を言われる資格はないの」

「え？それはどういう……」

そして俺の脳は本日何度目とも知らぬ思考停止状態へと陥った。眼前の少女が発した言葉の意味を正確に判断することができない。あの、俺を襲った惨劇がアイリのせい？一体全体どういう意味なのか混乱しきる俺に、続けて言葉をかけるアイリ。

「あなたの村を襲ったあのワイバーン。私がちゃんと倒せなかったからこんなことに」

要領を得ない説明だと思った。あの翼の生えた竜がワイバーンと



いう名称であることくらいしかわからなかった。しかし、どうやらアイリ本人もなんと説明してよいのわからない様子で、決まりの悪い表情を浮かべるばかりだ。

「えっと。よくわからないんだけど」

「急にそんなこと言われてもわからないわよね。順番に説明するわ」

彼女が言うにはこういうことらしい。

まず、アイリはギルドっていう組織に属していてその仕事としてあのワイバーンを討伐する仕事をしていたらしい。それで、アルカイト村からは結構距離のある岩場で発見、そのまま倒そうと試みた。だが、その岩場が崩れやすい構造をしていたとかで戦闘の余波であつさり倒壊。それに気を取られている内にワイバーンに逃げられた。仕方がないので、何とか足跡を辿ったが、アルカイト村をアイリが認識したときには時既に遅し。それで何とか俺が食われる直前には間に合い今に至ると。

「本当にごめんなさい。私がちゃんと討伐できていれば」

彼女はそればかりを繰り返して自分を責めてばかりだ。確かに、間接的に彼女のせいと言えないこともないが、それは違うと思う。それに彼女は確かに俺の命は救ってくれたのだから、それを忘れて自己嫌悪するのはやっぱり間違いだ。だから俺は、それを彼女に伝えなくてはならない。

「そんなことないさ。アイリは何も悪くない。そんな風に自分を

責めるのは間違ってる」

アイリが澄んだ蒼の瞳を俺に向ける。

「俺の村をめちゃくちやにしたのはあのモンスターだ。それは決してアイリのせいなんかじゃない。それに、俺はアイリに救われた。だから俺はこうして今確かに生きてる。君は自分の行為を悔やんじやダメだと思っ」

「そう……かな？」

「ああ」

「そう、よね。ごめんなさい。ちょっと取り乱しちゃって」

そう言っで一応納得してくれたみたいで、完全には吹っ切れてはいないだろうがそれは仕方ないことだ。いくら気にするなどは言ってもこれだけの数の人が死んだのだ、気に病まない方がどうかしてる。

「だから、素直に受け取って欲しいんだ。俺のありがとうって言葉」

「うん」

アイリは笑顔で頷いてくれた。その太陽のような眩しい笑顔は俺が初めて見るアイリの笑った顔であった。

## 第1話 外の世界

ひとまず話しに区切りがついたので、俺はアイリに今現在の状況を詳しく聞いた。

やはり、というべきか、俺が気を失っている間に村の探索をしたアイリが言うには俺以外の生存者は居なかったらしい。そのことを聞いたとき胸が張り裂けそうな気持ちになったが、アイリの手前強がってみせた。

そして、これからどうするかという話になったのだが、如何せん村はこんな状態で、俺はこの村の外の世界なんて全く知らない。果たしてどうするべきか、俺が思い悩んでいるとアイリから一つの提案があった。

「ねえ。私と一緒に来ない？取り敢えず近くの大きな街まで一緒に行ってそれからまたどうするか考えようよ」

確かにこの村に居続けた所で俺はどうすることもできない。これから俺がどのように生きていくにしても、どこか別の街に移動しなければならぬのは確実なので、連れて行ってくれるというアイリの好意に素直に甘えることにした。

「そう、だな。ここに居ても仕方がないし、お言葉に甘えさせてもらおうよ」

「うん。私が責任持って無事に送っていくわ」

「でも、どうする？直ぐに出発するのか？」

俺は空を見上げながらそう尋ねた。既に陽は落ち、夕暮れに包まれた赤い空。ここから一番近い村までどれくらいの距離があるのかは知らないが、夜の道に行くのは少々危険なのではなからうか。俺のその思考を読んだように、アイリも空を見て呟いた。

「うーん。そうね、今日のところはやめておきましょうか」

という訳で、俺たち二人は炭と化してしまった家屋の中から比較的無事な建物を探して、夜が明けるのを待つことにした。残っていたのは、恐らく村長の家だろう。さすが村で一番大きな建物だけあって損害が一番少なかった。そして、家の中に残っていた食材から料理を作ることになり、初めは俺が作るとすすみ出たのだが、アイリに休んでると言われ、かろうじて調理が出来る程には形を留めていたキッチンに立つアイリを見つめて、俺は料理を待っていた。

慣れた手際で料理を進めるアイリを見ながら、俺は考え事をしていった。当然、考えるべき事は俺のこれからについてだ。ここで生まれ、そして生まれてからずっとこの村で暮らしてきた俺にとって外の世界は全くの未知だ。俺ができる事といたら農作業なんかの手伝いくらいで、まともに働いたことなんてない。

そんな俺が、大きな街へ行った所で生活していけるのか、不安が押し寄せるもそれしか選択肢がないのだと気づき、内心ため息が出た。

そう言えば、キッチンで料理を続ける少女アイリは普段何をしているのだろうか、ふと視線を向ける。改めて見れば見るほど綺麗な少女だと思う。歳の頃は俺と同じ、十七くらいだろうか？

印象的な金色の髪を一つにまとめ、調理に励む彼女の後ろ姿は一見して普通の少女だ。しかし在りえないくらい可憐で纏う雰囲気まで神々しいくらいの彼女だけれど、俺の命の恩人であるアイリは一

体どのようにして俺を助けたのだろうか。今になって急に不思議だと思えてきた。

そもそも、彼女はあのワイバーンとやらの討伐の仕事をしていたといっていたが、一体どうやってあの人外のモンスターを倒したんだ？疑問が疑問を呼び、俺の頭の中は混乱していくばかりだ。

そんなとき、アイリが俺の頬の傷を治したときの出来事が脳裏を過ぎった。一瞬で傷を塞いだあの光。おそらく俺が気絶状態から目が覚めたとき全身の怪我が治癒されていたのもあの光のおかげだろうと思う。あの、不思議な温もりを秘めた白蒼の光、確かアイリは魔法と呼んでいたはずだ。

ここで、アイリから料理完成とのことで、一旦考えるのを止め、食事のときにでも直接聞いてみようと思いい俺は立ち上がり料理をテーブルに並べるべくキッチンへ向かう。

既に香ばしい匂いのせいで、俺の空腹感には限界に達していたのだが、出来上がった料理を見て更にそれは助長された。アイリが作ってくれた料理は、この廃屋同然の家に辛うじて残っていたものから作ったはずなのだが、そうだとはい到底思えない程美味しそうに見えた。

「へえー！これは凄いな。アイリって料理うまいんだな」

「まあ一応普段から料理は自分でするようにしてるからね。でもこれくらい練習すれば誰にでもできるわ」

謙遜の言葉を並べてはいるが、やや顔を伏せるようにして言ったその台詞には若干の羞恥が含まれているのが簡単に見て取れる。その、思わず微笑んでしまう様子を見て俺の心は穏やかになる。

「さっ。食べましょう」

「いただきます」

見た目通り、アイリの振る舞ってくれた料理は絶品の一言に尽きた。俺は今まで味わったことのないような幸福感に包まれながら、なんと気が付いたときには完食してしまった後だった。

あまりの美味しさに食べることに夢中になっていたようで、アイリの方を見ると俺を微笑みながら見ている。いつからそんな視線を向けられていたのかさえもわからない俺は、恥ずかしさの余り慌てて何か話題を探した。

「あ、あのさ！アイリにいくつか聞きたいことがあるんだけど！」

もはや疑問の形にすらなっていない言葉に、アイリはより一層笑みを強め、しかし頷いてくれた。

「ええ。いいわよ。何？」

「あの時、どうやって助けてくれたんだ？ それに俺の怪我を治してくれたるり、たぶん魔法、とか言ってたと思うけど」

「そう言えば、レナス、君ホントに魔法を知らないの？」

なんだか不思議な生物を見るかのような目を向けてくるが、生憎と本当のことである。首肯してそう伝えると、蒼い眼を大きく見開いて驚愕した。そんなに驚くことなのだろうか。ちよっぴり傷心してしまっ。

「うーん。この辺りはモンスターも居ないみたいだし、そんなものなのかな？」

アイリの言う通り、アルカイト村周辺にはモンスターがほとんど存在しない。現に俺は今日までその存在を目にしたことはなく、村の大人たちから伝え聞くばかりであった。曰く、人に仇為す人外の魔物。

だが、昔からこの村を直接襲撃されたことはなかったらしく、狩りを生業とする家の大人の男性たちが極低ランクのモンスターを狩り、偶に村に来る行商にモンスターの皮等を売り払う、俺にとってはモンスターとはそんな程度の認識しかない。

とはいえこれは俺に限らずアルカイト村の人全員に言える事だ。故にこそ、あの時ワイバーンの出現の折、あれほどの混乱が発生したのだから。

「まあ、明日は街道に行くことになるわけだし、説明はしておいた方がいいのかな」

アイリの説明によると、魔法つていうのは人が持つ神秘の能力のこと、らしい。世界に満ちる『マナ』を動力源に魔方陣を動作、世界の理に干渉し自らの幻想を現実へと塗り変える技術、らしい。魔法には地水火風の四大属性に加え、光と闇の二つ、計六つの属性つてのがある、らしい。何でも手から炎や風を自在に生み出すことが出来たりして、主にモンスター退治等の戦闘に転用される、らしい。

ここまで曖昧な表現なのは俺自身がさっぱり理解できていないからだ。果たしてそんなことが可能なのだろうか。しかし、俺の怪我を治したアイリの魔法は確かに俺の理解を超える現象であった。

「言葉で説明してもわからないよね」

「え？」

困惑する俺を見かねてか、アイリはそう言っただけで俺を外へ連れ出した。

「そこで見てて」

アイリは俺を家の扉の前で待つように指示し、自分は颯爽と距離を取る。ちょうど俺からは横顔が見えるように立ち、スッと右手を肩の高さまで持ち上げた。

次の瞬間、その現象は起きた。

まず、アイリの足元、彼女を中心に円形の紋様が浮かび上がった。俺には理解することもできない、複雑な文字と図形が絡み合った陣が白蒼の輝きを放つ。その澄み渡る空の色に輝く光は、アイリの全身から放たれていて、突き出した右手の先に集中している。そして俺の耳に届いた流麗なアイリの声。

《光よ、穿て》

【閃光の矢】

ライト・アロー

短いその声と共に一際強烈な光が発せられ、アイリの右手から一條の光の矢が飛び出し、その射線上にあった瓦礫の山が吹っ飛んだ。

「……は？」

啞然とするしかない。俺は不恰好にも口をあけて声を漏らしてし



まった。何だ今のは？今のが魔法？どうやら俺の認識は甘かったようだ。今のが一人の人間の引き起こした現象だとは信じがたい。

「今のが初級の魔法で、一番簡単な魔法ね。威力も大したことないけど発動までの時間が短いのが特徴よ」

……。一体彼女は俺の常識をどこまで覆すのだろう。今ので大した威力じゃない？もう、笑うしかなかった。

いや、たぶん俺の抱く常識などこの世界から見ればちっぽけなものなんだろう。きつと、アイリは俺何かよりもずっと物知りで、色んなモノを見て生きてきたのだろう。そう考えたとき、胸の内に去来した感情を俺はまだ認識できなかった。

屋内に戻り、腰を下ろした俺は相対するアイリに質問を続けるべくゆっくりと話しかけた。

「魔法って凄いな。普通みんなあんなことできるもんなのか？」

「そんなわけじゃない。魔法を使えるかどうかは先天的な資質に大きく左右されるわ。属性適正にも依るし、誰でも何でもできるってわけじゃないの」

うーむ。魔法ってのはそんな便利な万能の力ってわけじゃないみ

たいだ。先ほど超絶的力を見せ付けたアイリも、自身が持つ適正である光属性以外の魔法は殆ど使えないらしいし、魔法って奴は中々奥が深い。と一人得心していると、アイリがくすくす笑って説明を続けてくれた。

「実際、魔導師って結構貴重なのよ。だから各国の軍隊やギルドからは引く手数多だし」

「それだ、そのギルドってのも何なんだ？」

「ギルドも知らないの？ ギルドっていうのは簡単に言うと、『冒険者』の組織よ」

冒険者？ふむ。わからん。

「冒険者は各地を旅しながら、一般市民や、場合によっては国とかから様々な依頼を受けて、それをこなすことで報酬を得る人たちのこと。ギルドはその仲介役の組織なのよ」

「ふーん。つまり便利屋ってこと？」

「まあ、間違っではないわね。でも、依頼の大半はモンスターの討伐だから危険な職業でもあるのよ」

なるほど。アイリはその依頼の一つとしてワイバーンの討伐の仕事をしてたって訳だ。しかし、冒険者ってのもまた想像しがたい存在だ。あんな危険な存在であるモンスターを倒すのを生業にするのもやや信じがたいが、それをこんな少女がこなしているというのだから驚きだ。まさかアイリみたいな若い人ばかりということはないだろうが。

「大体、これで君が知りたいことは説明したと思うけど、他に  
ある？」

「いや、今日のところはこれくらいにしておくよ。一度に色々な  
ことを聞いても混乱するだけだし」

そこで俺たちは明日に備えることにして、身体を休めるべく寢室  
らしき部屋にそれぞれ向かう。よくもまあ都合よくそんな部屋が残  
っていたものだと感じしながら俺は重い足取りで歩き出した。

## 第2話 旅立ち

静寂に包まれた村の、かつて俺の家が建っていたその場所に佇み、俺は何とも言えない喪失感に囚われていた。無残に焼け落ち原型を留めていない我が家。他の場所より被害が大きくもはやただの炭と化しているだけ。

俺は、そんな光景を記憶に焼き付けるようにして見ていた。

「なんなんだろうな」

呟いた声はただ、夜空に吸い込まれるばかり。俺は、ふと空を見上げた。

昔から俺の髪と瞳は夜空のようだとよく言われてきたけれど、今もそうだろうか。俺が見上げる果て無き夜空はいつも変わらず澄み切っている。だが、俺の瞳は今きつと悲しみの渦に捕らわれ濁っているに違いない。そう確信できるほど俺の心は沈んでいた。

アイリの前では、驚きの連続のおかげもあって、何とか俺の心は崩れずにいたけれどいざ一人になってみると、俺はこの世界で一人きりになってしまったのだと感じてしまう。十七年、生まれてからずっと一緒に暮らしてきたアルカイト村のみんなはもういないのだ。友達も、家族も、皆あのモンスターに殺されてしまった。何故俺だけが生き残ってしまったのだ、そう考えずには居られなかった。

あるいは、俺がああ平穏が壊れるのを望んでいたからなのだろうか。最近、俺は胸の内に一種の危機感とも呼ぶべき感情を秘めていた。その心中を誰かに語ったことはなかったが、繰り返される日常

に不満を感じていたのは確かだ。同時に、俺はきつと、その平穩が崩れ去るのを待ち望んでいたのだ。

現に俺はその想いがなかったのだと完全に否定することはできない。勿論、こんな破壊など望んでいなかったし、今胸にある絶望感も本物だ。だが、その俺の平穩からの脱出という願いが俺を生かした理由ではないかと思えてならないのだ。

そして、俺を救ってくれた金色の光。俗世離れた雰囲気を纏う美しい少女アイリ。彼女から聞いた村の外の世界は俺の心を大きく昂ぶらせたこともまた真実である。魔法と呼ばれる理の力、世界に点在するというギルドなる組織、アイリの話の全てに俺は心躍らせたことも否定できない事実であった。

アイリに魔法を実演してもらったあの時、俺を揺さぶった謎の感情の正体、それはたぶん既に隠し切れないほどの興味だ。俺が今まで生きてきた世界の小ささを知った今、沸き起こる興味と探究心。

だが今は、この絶望と悲しみを押さえつけるので精一杯だった。今にも零れそうになる涙を抑えるのに必死だった。

だが、それも既に限界だ。頬を伝う涙を実感したとき、今まで押さえつけていた感情が爆発し、俺は夜空の下、声を押し殺しながら一人で泣きじゃくった。ただ、胸に刺さる痛みを、渦巻く哀しみを、全て発散せんと涙を流し続けた。

翌朝目が覚めたとき、俺はどの様にしてベッドに戻ったか余り覚えていなかった。自分でも思い出すだけで恥ずかしいので、記憶を辿ることすらせずに、しかしやや腫れた瞼を如何にして誤魔化すか

を思案した。ただ、思いの外腫れていたもので、もしかしたらアイリにバレるかもしれないと恐々としたが、顔をあわせた際に特に指摘されることはなかった。

「じゃあ出発ね」

それだけ言っつて、そそくさと歩き出すアイリだったが、それでは逆にわかってしまう。たぶん気付いていて何も言わないでいてくれるのだろう。感謝と同時に申し訳ないと思いつながら、後に続いていた。

既に昨晚村との別れは済ませておいたが、いざ出発となると淋しさが再燃してしまう。村の入り口で立ち止まり、振り向く俺。同時に無言で俺の隣に立つアイリには本当に感謝してもしたりないが、今はただこの景色を記憶に、そして俺という存在に刻み込んだ。

「いつてきます」

短く、だがハッキリと呟いたその言葉を、俺は誰に向けて言ったのだろう。風に乗る、青い空に溶けたその文句は、村の皆へ向けてか、あるいは、かつて世界を夢見ていた俺自身への挨拶であったか。いずれにせよ、不可思議なことではあるが俺はその返事を聞いた気がした。

村を出て数時間、数回の休憩を挟みながら街道沿いに歩いていった俺とアイリ。村からここまで離れたのは初めてで、高揚する気持ちを隠し切れずにいた。だが、先行していたアイリが足を止めたので、一体どうしたのかと近くに寄ると、アイリは鋭い声で俺を制した。

「止まって。私から離れないでね」

その初めて聞く声色に否応なく緊張が伝わり、俺は息を殺して傍に寄った。周囲を警戒するアイリだが、俺には別段何も感じることができない。横目でアイリを見れば、その表情は堅く、ある一点を見つめている。これが冒険者の顔、というやつなのだろう。俺を押し黙らせるくらいの迫力があり、俺はアイリの見つめる視線を追った。

そこにいたのは、四足歩行の狼型のモンスターだった。数は一、だが向こうも俺たちに気付いているのは明らかだ。見た目は普通の狼と殆ど違いはないが、姿から感じられる凶暴さとも言うべき部分が強くなっている。わかりやすい所で言えば爪と牙だ。人を容易く殺めることができるであろうソレはギラギラとしている。その姿に俺は恐怖心を禁じえなかった。

「そんなに怖がらなくても大丈夫よ。あれはDランクモンスター、ウルフ。一匹だし、私に任せといて」

アイリには隠し事などできないな。容易く見抜かれた俺の精神だが、思わず見とれる程の笑顔で言った台詞には自身と余裕があふれ出ている。

そして空の色に輝くアイリの身体。魔法だ、と俺が感じたときには既にソレは放たれていた。

### 【閃光の矢】

ライト・アロー

昨日実演してもらった魔法だ。空色の光が矢となり、ウルフ目掛けて宙を駆ける。だが、ウルフも当然こちらに気が付いているわけで、容易く避けられてしまう。しかし、俺の視線がウルフに向いて

いる内に、アイリはもう一度魔法を発動していたようで、続いて飛来した光矢に貫かれ、あっさりと絶命した。

……。あまりにもあっけない結果に、俺はやや拍子抜けだった。俺の知るモンスターというのはワイバーンだけで、そいつは俺の村をめちやくちやにした存在だ。だから、モンスターというのは皆、強大な力を持っているのだと思っていたのだが……。俺がそのことをアイリに話すと彼女は微笑んで教えてくれた。

「それはワイバーンの討伐難易度はBランクで、ウルフはEランクだからね。まあ拍子抜けしちゃうのも仕方ないかな」

各モンスターには討伐難易度とやらが設定されていて、それがモンスターの強さの指標になっているらしい。街道周囲をうろついているようなモンスターは大体EからCランク辺りでアイリなら簡単に倒せるとのこと、ちょっと安心した。まあでも、ワイバーンみたいなのがそこら中にうろろしてたら安心して暮らしたりできないよな。

「それにしてもアイリの魔法は凄いな。まだ二回しか見たことないけど、すっごい綺麗だし、今なんて二連射だろ？」

「そんなに大したことじゃないわ。初級魔法の連射なんてある程度経験のある魔導師なら誰でもできるしね」

「でも俺思ったんだけどさ。昨日見せてくれたときと何か違ったよな？昨日は光だしてからもうちよい時間が掛かったし、発動前に何か唱えてたのに今のは無言だったよな？」

俺が思った通りのことを尋ねると、アイリはやや驚きの表情を浮



かべた。

「魔法を知らないのによく気付いたわね。そうね、レナスの言う通り昨日は詠唱までやってたから発動まで数秒かかったけど、無詠唱なら殆どタイムラグなしで連発できるわね」

俺にとってはやや頭の痛くなるような説明によると、通常、魔法を発動させるのには幾つか手順を踏まなければならないとのこと。まず大気中から『マナ』なるモノを取り込み、任意の属性に変換、そしてそれを動力として魔方阵を作動する。だが、魔方阵を構築する際は『詠唱』と呼ばれる各魔法固有のキーワードによって呼び起こす。言霊に乗せることで世界の理に干渉しやすくなり、スムーズに魔方阵が構築できるのだが、卓越した術者は初級魔法なら、己がイメージで以って世界に干渉することが出来るらしく、その場合は魔法の発動までのスピードが格段に上がるらしい。

「ふーん。魔法って奥が深いんだな」

「そうね。そもそも適正のある人しか使えない上に魔法の理論って物凄く難しいからよっぽど興味があるか、私みたいな冒険者とかあるいは軍人みたいな人以外には無縁のはなしだしね」

「じゃあさ、俺も使えたりするのかな？」

「うーん。どうだろ？絶対に無理とは言わないけど調べてみないことには何とも言えないわね。というか、魔法使いたいのか？」

「そりゃ使えるなら使ってみたいさ。調べる方法なんかあるのか？」

「あるわよ。でも特定の道具が必要だから今すぐってわけにはいかないけどね」

残念。ただまあ、憧れるものはあるのでできれば調べて見たいんだが……。そしてその思考はでかどかと俺の顔に書いてあったようで、またしても俺の心を読んだアイリがやや苦笑していた。俺ってそんなにわかりやすいだろうか。

「今から行く街のギルドに行けば調べることが可能だけど……。レナス、もしかして冒険者になりたいの？」

「え？」

突然投げかけられた疑問に、俺は即答することができなかった。そんなこと考えたこともなかった。俺のこれからのことについて考えていなかったわけではない。これまでの道中も何度も思案していたが、俺は常にその決定を先延ばしにして、全ては村に着いてからだと思い込み深く考えようとはしなかった。

だが、俺が冒険者に……？

「レナスがやりたいというのなら私は別に何も言う気はないし、何よりそんな資格はないけど、よく考えて決めたほうがいいわよ。命にも関わる仕事なんだから」

「俺は……」

アイリの言う通り、簡単に決断すべきことではないことは重々承知済みだ。だが、俺の胸に空いたこの空洞、今まで満たされることなかった心の空白は一体何を求めているのか、俺は既に気付きつ

つある。この想いは一時的なものかもしれない。見たこともなかった魔法、語ってくれた俺の知らぬ知識、そして何より俺を死の運命から救ってくれたアイリの凛々しくも美しいその姿に俺は憧れているのだ。だから、これは状況に流されているだけだ、そう考えることもできる。

しかし、俺は自分に正直に生きたいと思う。俺を取り巻く全てを失った今、唯一残る俺自身。そんな己の気持ちすら無視して生きていくなど、できない。

今、俺の目の前には無数の選択肢があるのだろう。そのどれを選んでも誰も文句は言わないし、そして誰も責任など取ってはくれない。だからこそ、自分の選択に後悔しないため、俺は俺の望むように生きるべきなのだ。そ

それに俺はまだアイリに何の恩も返してはいないではないか。たぶん、これが俺の根底にあるものだ。だから、俺の答えなどとづくに決まっていたのだろう。

今も迷惑ばかりかけ続けている俺にはこんなことを言う資格が無いのかもしれない。だが俺はハツキリと言葉にして伝えることにした。

「俺、冒険者になってアイリと一緒に旅がしたい。駄目か？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0245ba/>

---

光の聖女と夜天の剣

2012年1月2日11時46分発行